

ありふれたことだが、気持ちの中では何か人生最大の別れの場面に身を置いていような感じがした。ところが一方では、どこかさめた目でその雰囲気を楽しんでいる風でもあった。

ところで別れという悲しさの裏側では演出という要素が少なからずその役割を果たしているのではなからうかと思う。つまり意識するしないは別としても、演出という行為があつて別れは世間一般に言われる悲しい別れとなることが多いのではないだろうか。またそれによつていつまでも記憶に残る出来事となるはずだ。

今でも昨日のことのようにその日の上野駅の情景が蘇ってくるのだが、これには今だから言える演出が実はあつた。東京を離れるはずのその日は、同時に引越しの日でもあつた。当初、用意された引越しのトラックに乗つてまっすぐ福島に戻る予定だった。ところが友たちが見送ってくれるということなので急遽予定を変更して大宮町までの列車を選んだ。つまり場所を上野駅に移して別れを演出してみたのである。

このようになちよつとした演出が料理のスパイスのように、その場の味をがらりと替えてしまうことは間々あることだろう。その意味からすれば天気も広くは演出の中に含まれるのだが、残念ながらこればかりは自分の意思ではどうにもならないのである。しかし考えてみれば天気だけに頼つてそれを過去を思い出す手懸かりとするよりは、

自分で演出した場面の方がよほど鮮明だろう。つまり私が今まで経験した別れの日にただ漫然と暗れていたことがかえつてその場の状況を思い出すのは都合がよいのかもしれない。雨の中は別れなどというの自分酔わせてしまふだけではなからうか。

人それぞれにいつまでも残しておきたい思い出とか忘れたくない友だちとかがあるだろう。そんなとききよつとした自分なりの演出を加えておけば、後々素敵な出来事として思い返せるのではないだろうか。就職して四度目の桜が、漫然と晴れた中で散るのを眺めながら、そのようなことを考えていた。

(県立博物館主事)

### つまずきを生かす

石田 秀喜



ある日、いつものように教室に入ると、子どもたち全員が後ろ向きになつて座っている。いつもの冗談かと思つ

たが、何やら様子がおかしい。いくら言葉をかけてもいつこうに反応が返つてこない。これが、私の教師生活における最初のつまずきであった。

こうなつたのには訳があつた。前日の愛校活動の時間に、他のクラスの子どもたちが、一生懸命奉仕作業をしている中で、私のクラスの子どもたちだけが、何人かずつかたまつてはおしゃべりをしていた。それをみつけた私は、「何回注意すればわかるんだ。それでもおまえたちは五年生か!」かなり感情的に彼らを叱つてしまったのだ。

しかし、それまでの私は、彼らに対してある種の安心感を抱いていた。私と彼らの間には、信頼関係ができていたと確信していた。休み時間には一緒にドッジボールをし、放課後にはサッカーをした。また日曜日には子どもたちを下宿部屋に招き、大学時代のことを話して聞かせたりした。夏休みには、五人ずつのグループごとに、私の実家に遊びに連れていったりもした。

こうして私は、「子どもたちとのふれあいを大切に」と考えて、努めて子どもたちと接する時間を作ってきたつもりだった。しかし、そのふれあいも知らず知らずのうちになれあひになつてきたのかもしれない。

一度関係が気まづくなると、なかなかすぐには戻らない。その後の一、二週間は、授業でも休み時間でも、以前のような活気がみられなかった。

そこで、それまでの自分の指導を反省し、いくつか私なりに努力してみようと思つたことがあつた。

その一つは、子どもたちを呼び捨てにせず、さんや君をつけることだった。呼び捨ては親しみがあつた証だなどと勝手に決めこんでいた。子どもたち一人一人の人格を尊重することが大切だと思つたからである。

二つめは、お互いに時間を守るように心がけるといふことだった。けじめある生活を送るためには、欠かすことのできないことだと思つたからである。そして三つめは、フォロワーを忘れずにしていこうということであつた。叱り放しにしない。そのあと認め、励まし、賞賛の言葉を必ずかけてやるよう努めるといふことであつた。

これら三つのことを頭におき、試行錯誤を繰り返していくうちに、今まではなかつた、私と子どもたちの関係が見えてきたような気がした。

こうして考えてみると、私はこれまでに随分たくさん失敗やつまずきを経験してきた。しかし、つまずいたことで、改めて自分の足元を見直そうと、そこで貴重な何かを得ることが多かったのも確かである。教職七年目、慣れはしてもなれなれしくなつたり、情性に流されることのないようにと、今自分に言い聞かせている。

(田島町立田島小学校教諭)